
Load And Sin

五色影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Load And Sin

【Nコード】

N8867D

【作者名】

五色影

【あらすじ】

誠に申し訳ありませんが、作者の文章力をつけるため、しばし休載させていただきます。絶対にこのままにはしません。どのくらいになるかは分かりませんが必ず再開します。主人公兼転校生、間月煌^{まつき}とお嬢様（?）、武道家（?）な友人達が織り成すちょっとハズレタ暴走学園モノの始まり、始まり♪王道行くか、斜め上（下?）行くか、それとも思いつき邪道に行くか、それは作者にも分からない（オイ）コメディはノリで行くんでよろしく！内部構成は、コメディ、シリアス8…2でお送りします。

第一部：序章 紅い夢（前書き）

いきなり、シリアスの2が来ちゃいましたorz
次回からは、ちゃんとコメディが来ます。

第一部：序章 紅い夢

小学校低学年程の少年が普通の一軒家の前に立っている。

少年の髪型は、白髪半分、黒髪半分、とてもじゃないが、若白髪とは言えない程の白髪の量だ。

さっきまで遊んでいたのだろう。所々服には泥が付いていた。

友達と別れ、淋しげながらも満たされたような笑顔で少年は自分の家の玄関に手を掛けた。

その瞬間、少年の笑顔が凍り付く。なぜなら、少年にはまだ分からない本物の殺気伝わってきたからだ。

大人でも踏み込むのを躊躇うような殺気に少年は全く怯まずに玄関の扉を開け放った。

ここは——どこだ？

目の前が……紅い。

ああ、そうか、またこの夢か――。

俺は、以前住んでいた家――そしてまた住みはじめたこの家を進む。昔や現実とは違う紅く染まり、壁や床が割れぐちゃぐちゃになった廊下を進む。もう何度目だ？ この夢を見るのは……。結末なんか分かりきっているのに……。

それでも、夢の俺は、紅く血まみれになったボロボロの床を走る。走っても結末は変わらないのに……。

間に合わないんだよ、父さんや、母さんは助からない。夢の俺は、そんなことなど知るはずもなく、リビングへのドアを開ける。

「――っ!?!? 父さんっ、母さんっ!?!?」

目の前に広がっていた光景は、廊下と同じように紅く染まり、バラバラになった家具、陥没や亀裂の入った床や壁、ずっと住んでいた家とは思えない凄惨な姿だった。

そしてバラバラになった家具と一緒に中央に倒れている二つの身体。この家を紅く染めたモノ――俺の両親……。

ほら、間に合わなかった。

当たり前だ。

過去は、変えられない。

この時、父さんや母さんが生きていたらどんなに良いか、いつもの悪戯の時のように笑って

「今、リフォーム中なんだ」って言っていたらどんなに良いか――。

だけど、その”If”に意味はない。

過去は変えられないし、俺は二人が生きていたらなんて想像できない。生きていたら俺はきつとこんな道は歩まなかったはずだ。

「カツ！　てこずらせやがって、だがまあまあ楽しめたぜ。さすがは俺様と同じ裏七闇家の二人だ」

「っ！？」

夢の俺が振り返った。

そこに立っていたのは、ニメートルを超える巨体、短い茶髪の青年だった。白いTシャツは紅く染まり手には刃渡り20センチ程のナイフを持っていた。

潰重 ツイシゲ 壊 カイ――俺の大切なモノをいくつも奪った男……そして――俺がついこの前、殺した男。

「お前が――殺したのか」

「あん？　ああ、なんだ、ガキか。そういや言ってたなあ。コイツらの子供が一人いるって。ざーねん♪　チミのパパとママは、天国へ飛び立ちました♪　解りまち――」

「黙れえ！　よくもっ！　父さんや母さんを――！」

潰重は、血の付いたナイフを軽く払いながら面倒臭そうに返事をし、夢の俺を視界に入れた瞬間、厭らしい笑みを浮かべ愉快そうに口を動かす。

夢の俺は散乱した家具の中から金属の棒を手に取り、短髪の男、潰重へと殴りかかった。

「あ？ 殺すぞ、ガキが」

潰重は素手で受け止め、ドスの効いた声で脅す。夢の俺は、金属棒をすぐに引き、もう一度殴りかかった。

「もう一度言うぞ、ガキ。こ」夢違現ムイノウツツっ！！「ろっ！？ グッ」

潰重は、頭上からくる鋭い打ち込みを両腕で受け止めながら、最後の忠告を言おうとしたが受け止める瞬間に脇腹に衝撃を受け、顔をしかめた。

鋭いが視認できる程度の速さで打ち込み、相手が受け止める瞬間にできた隙間に打ち込み、ガードしている場所に再度打ち込む。

夢違現——夢とは違う現実。

俺が最初に覚えた奥技。

「ガキイイ、今のは、ちょっと効いたぜええ。しかし——成る程、アイツが言っていたのはこのことか」

潰重は、脇腹を右手で押さえながら、それでもまだ笑って喋っている。しかし、夢の俺は、潰重の言葉に聞く耳を持たず、攻撃を続ける。

「天墜」

背の小さい夢の俺は、2メートルを超える男の肩口へ一撃を入れるために跳躍し、振りかぶって金属棒を垂直に潰重の肩口へ叩きつける。

「ガアッ、調子に乗るなよクソガキがああ！」

潰重は、叩きつけられた金蔵棒を掴みそのまま、夢の俺ごと壁へと、投げつける。

「ウアッ」

夢の俺は、呻き声を上げながらも、再び潰重に殴りかかる。

——ずっと繰り返し観た夢、この先どうなるかも簡単にわかる。

「ハッ、この程度で俺様を殺せると思ってるのか？ 笑わせる」

潰重は、殴りかかる夢の俺に左手をかざす。その左手に何か透明な炎のようなモノが揺らめき、次の瞬間、夢の俺は何か弾かれたかのように、再度壁へと叩きつけられる。しかし、今度のは、先程の投げられた時とは比べ物にならない程の威力だ。

「グアッ」

夢の俺は倒れたまま、痙攣して動かない。——否、動けない。懸命に立ち上がろうと手を動かすがやっと指先が動く程度だ。金属棒は、再度叩きつけられた時に手放し、今は指先から1，2メートルは、離れたところに転がっている。

「じゃあな、クソガキ。あっちで、パパやママと遊んでるんだな」

潰重は夢の俺の近くに立ち、頭に手をかざし再び透明な何かが揺らめく。

「さようなら、不幸な少年」

そこで、世界が変わる——。潰重が、夢の俺が、グチャグチャになった家が混ざり合い黒く染まっていく。

そして、俺は目が覚めた。

第一部：序章 紅い夢（後書き）

五…小説初めて書くのにいきなり、戦闘シーンを書いた愚者、五色影でございます。

煌…稚拙という言葉すらもつたない文章力で何やつとるか

五…すいません。ここは、ボクがある程度力がついたら改訂するんでご了承下さい

煌…ちゃんと力付くといいがな

五…ウツシャ、次からコメディいくぞ、コメディ！ つつーかテメエ設定とキャラ違うんだよ。

煌…次回も、よろしくお願いします

五…無視！？

一章1：転校生（前書き）

最初にちよつとだけシリアスなのが混じります。

一章1…転校生

朝だ。

窓から差し込む日の光がベッドの上の俺を照らす。普通の人なら爽やかだなあ、とも思っているが目を覚ますだろう。

――が！ この今の煌君には、ウザイことこの上ない。

久しぶりに熟睡したと思ったら、案の定あの夢を観て寝覚めは、最悪だ。

そこへ、朝とはいえ暑さの残る――否、まだまだ暑さ現役、9月初旬の日光を浴びるとなると、暑いダメな&低血圧な俺の寝起きを挫くには、十分な材料となる。

まあ、そんなことは措いというて、俺はちよつと急ぐ。転校生が初日から遅刻というベタなまねは、したくない。学校……ねえ。4年ちよつと振りか。あれからずつと行ってねえもんなあ。

『お……まえばっ、生き……て前……に進め。お前に……こ……こは、似合わ……な……い』

頭の中で、言葉が反芻される。分かっている。だから今日から行くんだ。俺らが願った夢、それを果たすために。

もの思いにふけりながら、居間のテレビをつけると、

『ただ今7時58分、ただ今7時58分』

「ぶっ!？」

目覚まし時計型の手足の生えたニュースのマスコットキャラが現時刻を言いながら飛び回っている。

思わず吹き出した。イヤ、何も口に含んでないけどね。何かノリでんなコトはどーでもいい。ヤバくね？ 俺が行く中学校ってこっから走って15分はかかるよ。ベタが現実のものに！

俺は、急いで制服に着替え、食パン2枚を焼かないまま何も付けず

に食べた後、コップに注いだ牛乳を一気飲み。ここまで10分。意外と常識の範囲内の時間。歯を磨いて、髪の毛——はいいや、面倒臭い。どうせ、いつもほったらかしだし。

カバンを持って、外へ出て鍵を閉める。ケータイで確認すると8時15分。

マジでギリギリじゃん。

ケータイをポケットに入れると、Let's ダッシュ！ 俺は転入する中学校へ走る。

「あちい〜」

何故夏休み明けはこんなに暑い。神様もひどいぜ……まったく。休み明けの鬱な気分を増長させないでくれ。目〇ましテレビの天気予報じゃ、

『8月上旬の暑さになるでしょう』

ホントやめてくれ。夏は好きだけど、テンション下がる日はやめてほしい。

「剣ツルギいい、元気かあ！」

心の中で愚痴っていると、この〈転校生〉の話しか出る予定のない、名も無き部活の友人が話しかけてきた。

「ひどっ！ そりゃねえよお」

「黙れ、”名も無き友人A”」。テンション下がってんのが分からんか、”名も無き友人A”」

、つつーか、そのキャラはオレだ」

「強調するな！　ねえ、ホントにオレ出ないの？　名前無いまま消えてくの？」

その予定です。B y 作者

「そんなあ」

「黙れ」

オレは、名も無き友人Aを少し殺気を込めて睨む。ところでオイ作者、人の思考に勝手に進入するな。

「ごめんなさい、なんかもういいや。それは措いといて、剣、今日転校生来るらしいぜ」

半泣きで謝った後、奴はもう諦めたような顔をして本題に入った。ふむ、転校生か。

面白そうだな。つつーか、何で知ってんだ、コイツ？

「何故なら、氷室の弟に聞いたからだ」

ああ、あの情報兄弟か。男子か、女子か、どっちか――

「男子らしいぞ。んでもって、お前のクラスに入るらしいな。これで、女子が来ればラブコメフラグが立つんだが」

女子じゃないか……戻りかけたテンションが少しダウン。オレのクラスか。どういう奴かな

「なんか、白髪がすげえ多いらしいぞ」

今まで、スルーしてたが……

「テメエ、いい加減にしろよ、コラ。コメデイの伝家の宝刀、”相手の思考を読む”を使い捨てのテメエが気安く使ってんじゃねえよ」
「すいませんでした」

また半泣きになりながら謝る友人A。転校生のことは、大抵分かった。これ以上はあのバカ（友人A）に聞いても分からないだろう。転校生のことを頭の隅に措いておくとして、始業式のバカ長い校長の話をどうやって時間潰すかを考えよう。

「転校生のことは、それぐらいしか分からん。んでさあ、『キーンコーンカーンコーン』うわっ、チャイム鳴っちまった。じゃあな、

剣」

話題が変わった瞬間、予鈴が鳴った。友人Aは、チャイムが鳴ったら走ってつちまった。

ああ、じゃあな、友人A。この場でも、この小説でも。

オレは心の中で、別れの挨拶をすると、オレも教室へ向かって走る。

「ぐはあゝ。疲れたゝゝ」

何とか休み明けに遅刻は免れたが、やっぱ、朝からダッシュはきつい。

席に付いた瞬間、オレは机に突っ伏すと前方の扉が開き、担任が入ってくる。

「おらあ、お前等、席に着けえ」

若くゴツイ担任は、高崎先生。体育かと思いきや、数学という教科を教えている。体育会系で厳しそうだが、意外と

「これ終わったら、始業式だ。お前等、校長の長話には、頑張って耐えろ。オレは、サボってるがな！ フハハ」

適当で、この学校の中では1番生徒の心が分かっているといわれ多くの生徒に慕われている。因みに愛称はタカチャン。

「ああ、そうだ。うちのクラスに転校生来るからよろしく」

高崎は、思い出したかのように言った。まあ、こう来ると質問をぶつけたくなるのが生徒の性でみんな質問をぶつける。

「男子ですか？ 女子ですか？」

「外見は？」

「どこから来たんですか？」

「住所は？」

「電話番号は？」

待て、

「メルアドは？」

「好きな食べ物は何？」

待て、待て、待て

「趣味は何？」

「部活は何？」

待て待て待て待て。おかしいぞ、3つ目以降は本人に聞くべきだろう。

「男子だ。外見は、まだ見てないから知らん。それ以降は本人に聞け」

「タカチャン、ナイスツッコミ！」

思わず、声に出してしまった。みんながこっち見てる。冷たい目で……。「何だよ、斬^{きり}埼^{さい}（オレの名字）、空気読めよ」的な視線が突き刺さる。イヤア、助けて。

「オウ、サンキュー。オラ、お前等時間だ急げ」

心の中で震えてるとタカチャンが礼を言い、オレ等に指示を出した。みんなは睨むのをやめて、式へ向かう準備をしている。ありがとう、タカチャン。

「やっと着いた」

ただ今、約8時35分。走ってる間にチャイムが聞こえたからそのぐらいだろう。確か、始業式が、8時半からだったから……………
……………うん、遅刻だ♪

とりあえず、職員室に行かないとな。式中だけど、誰かいるだろう。一階を彷徨うこと30秒。速攻で見つけた。さて、中に入らないとねい。

「失礼しまゝす」

ドアを開けて中に入る。――誰もいない。あれ？ 間違えた？ いや、それは無い。だって、職員室って書いてあったし、中もデスクワーク用の机だし、イスだってくるくる回る奴だし。

「オーウ、コッチだコッチい」

そんなことを考えてると、配布棚らしき棚の後ろから男性の声が聞こえた。声がしたほうに行くと、若くゴツイ男の人がコーラをラッパ飲みしてた。しかも1.5リットルのヤツを。

「遅刻だぞ、転校生。遅すぎるから、モン○ンのリ○レウスを5回も狩っちまったぞ」

モン○ン？ ああ、最近流行のゲームだったか。つつーか、5分くらいしか遅れてないけど？

「まあいい。それにしても白髪多いなあ、お前。半分くらいは白髪じゃねえか？」

「あはは、先生ですか？」

「おう、お前の――間月^{まつき}煌^{きら}だったか、煌のクラスの担任、高崎^{たけし}剛だ。よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

白髪が多いことで苦笑しながら聞いた。相手は、担任だったらしく、挨拶をしながら手を差し出す。俺は、挨拶を返し、礼をした後手を握り返した。

「始業式終わったら、教室で自己紹介な。オレのクラスは、個性的な奴らがたくさんいるからな、覚悟しとけよ？」

「はいッス」

自己紹介ねえ。何言おうかな？ とか考えていると、高崎先生が話しかけてきた。

「煌、式が終わるのを待つのも暇だろ。何かやろうぜ。モン○ンは、生徒だから、ダメだな。ウシ、ボードゲームにすつか。チェス、オセロ、将棋、囲碁、人生ゲーム、ほとんど揃ってるぞ。何がいい？」
オレに拒否権無いのね。まあいいか、どうせ、ホントに暇だし。ど

れにしようかねい。チェスがあったか、よしチェスにしよう。

「いいッスね、じゃあ、チェスやりましょう」

「オ、チェスか。いいだろう。オレは、結構強いぞ？ 1つ自慢するとオレは国際審判だ」

「マジッスか！？ すごいじゃないですか」

国際審判か。どのくらいかな。

「おお、分かってくれるか。クラスの奴らはみんな分かってくれなくてよ」 「まあ、チェスにはクラスだけで、プロとかはないッスからねえ」

「そうなんだよ、将棋とかと違って、外国のボードゲームだし、オセロと違って、ややこしいだろう？ だからなあ」

話してる間に、高崎先生は自分の机の引き出しからチェス版と駒を用意し、俺も駒を並べている。チェス……かあ、久しぶりだな。

「――で、どっちが白にする？ トスか？」

「先生のすきなほうでいいッスよ？」

「そうか、じゃあオレが白な」

「じゃ、俺は黒ッスね」

チェスは、白が先行、黒が先行と決まっている。俺が後手か。

「よし始めるぞ。そら、最初はここだ」

高崎先生は、最初に俺から観て右側のナイトを前に出した。

「じゃあ、スタンダードにこれを」

俺は、真ん中のポーンを2マス進める。

「ほい、ここ」

「俺はここッス」

そうやって、進んでいき……

「はい、チェックメイトッス」

「ガアア、負けたあ」

俺がクイーンを端に追い詰めたキングの隣に置く。クイーンを取る

うにもナイトが効いていて取れない。要するに、オレの勝ち♪ いやあ、強かった、強かった。最初に先生が手え抜いてなかったら負けてたな、うん。

「煌、お前、かなり強いな。やってたのか？」

「はい、じいちゃんや、前居た場所の友達とかと」

「そうか、そろそろ式も終わるはずだ。また今度打とうぜ」

「そうッスね、先生今度は、最初から本気でお願いしますよ？」

外が、騒がしい。先生の言う通り終わったようだな。さて、これから俺の普通の学校生活が始まるわけだ。ちょっと緊張するね、やっぱ。

「ほら、いくぞ、煌」

いつの間にか先生は、チェス版を片付けていて入り口の近くで俺を呼ぶ。

「はいッス」

そして俺達は、廊下へ出て俺の編入するクラスへ向かう。

教室の前に来て、先生が声をかける。

「いいか、俺が入れて行ったら入れよ」

ふむ、ベタだな。

「はいッス」

返事をする、先生は、教室に入ってしまった。中で先生が話している声が聞こえる。俺は、暇なので、廊下の窓から外を見る。快晴ですな。見てるだけで暑くなる。うわああ、煌君の体力ゲーが、減少中。見なきゃよかった。

「オーイ、入れい」

真面目に後悔していると、先生の声が聞こえてきた。

一回深呼吸。別にしなくてもいいけどした方が雰囲気出るかなあ、
と思ひまして。誰も見てないけど……

ドアを開けて黒板の前に立つ。

「間月 煌です。よろしくお願いします。因みに、字は、間という
字に月、煌は煌めくという字です。〇〇県から来ました。趣味は、
読書とかですかね。特技は、チェスでさっき、高崎先生に勝ちまし
た。部活は、まだ決まってません。住んでる場所は赤篠の、セ〇ン
の近く和風の家です。メルアドは、ピー（自主規制）で、電話番号
は、ピーで、ケータイの方は、ピーです」

「――だ、そうだ。すごいな、お前、俺が朝質問されたやつほとん
ど答えたぞ。お前等、ほかに質問あるか？」

へえ、先走って質問されそうなやつを答えたけど、まさか先に先生
に質問してたとは、なかなかやるな、このクラス。――何がって聞
かれても困るんだけど。

「必殺技は何ですか？」

必殺技！？ 何だそれ、そんなの聞くの？ 普通、他の質問とかだ
ったら、『将来の夢は何ですか？』とかだろ！ この一言で先生の
言ったことが理解できたよ。

「えーっと、サンダースクリューアルティメットスプラッシュデス
トロイツイストスタートリプレンボークラッシュャーです」

とりあえず、即興で作ってみた。自分で作っというアレだが、よく
舌嚙まないで言えたな。

「宿敵は、誰ですか？」

宿敵！？ また同じヤツからの質問が来た。今度は、宿敵！？

「魔王です」

とりあえず、即興でまた答えた。俺は勇者かつ！？

「とりあえず、破壊したいモノは何ですか？」

また同じヤツからの質問。もういいや、つつこまないよ、もう。

「オリハルコン」

『ずいぶん硬いな、オイッ』

クラス一同そろってのつつこみ。何故俺!? why? 必殺技とかには、つつこまなくて、そこでつつこみ!? 「剣、馬鹿なこと言ってるな。他に、質問は?」

『無いです』

訳の分からん質問をしてきた奴は、剣って言うのか。つつか、こいつ等何でこんなに声揃うの? つーか、ねえのかよ。

「じゃあ、席は――、あのバカ後ろな、窓際の後ろから2番目」

「タカチャン、バカってひどくね?」

つる――バカの後ろか。面白くなりそうだな。

「心の中で言い直すなあ、転校生!」

「うるさい、コメディの伝家の宝刀”相手の思考を読む”を二話目から使うな、ボケ役(予定)のクセして」

「お前もだろうが!」

「俺は、オールマイティ(予定)だ」

「ほら、さっさと席に着け、煌」

「ういゝッス」

剣とかいう奴と話していると、先生に注意された。自分の席に向かいながら周りを見渡すと、みんなマンガ読んだり、後ろや隣の奴と話している。アレ? キミたちつつこみは揃ってるのに、結構自分勝手なのね。

「ようし、学活は、これで終わりだ。この後、給食の準備して、食べ終わったら、帰っていいぞ」

そう言うと、先生は職員室に帰っていった。その瞬間、みんなが、立ち上がって俺の方に――

あー、これが転校生の運命、さだめ質問攻めですか。なら、さっきの質問タイムにしろよ。

まあ、これからは、面白いことになりそうだな♪

一章1：転校生（後書き）

五：はい、二話目投稿！

煌：オイ、イマイチノッてないんじゃないか？

五：ま、一章は、キャラ紹介なんで

煌：ハッチャけるのは、二章からってことか。

五：そゆこと。書いてて思ったんだけど、モン○ンのGが発売するそうだね

煌：このバカは、弱すぎて2ndで止まってるがな

五：うるさい、これから徐々にテンション上げてくんできろしく
お願いします

煌：ほいじゃ、さよなら！

一章2..ヘタレ? (前書き)

やっ
と少しハッ
チャけてきたかな?

一章2…ヘタレ？

転校して次の朝、俺はあのクソウザイ日光を浴びながらベッドから上半身を起こしてまどろんでいる。

「やっぱ、眠れなかった」

俺は、二ヶ月に一度ぐらいしか、熟睡できない。それ以外はずっと起きてるかというと、そうでもなく起きた直後のような半覚醒状態にいる。そういう訳で、今もボーツとしているんだ。それでも、ずっとこうしているわけにもいかない。

「起きるか——」

枕元にあるケータイを見ると、ただ今——
5時17分

イヤ、早く起きすぎだろ（眠ってないけど）！ さて、どーすっかなあ。

うん、とりあえず着替えよう。

ベッドから出てタンスから着替えを取り出す。この時間から制服でいる気は、毛頭ないから、テキトーにTシャツ等を取り出す。白い半袖のTシャツに淡いグレーのジーンズ。これらを取り出し着替える。

センスが無いだって？ 服なんて着れて、機能性に優れてりゃ良いんだよ。

さて、着替えたことだし、朝飯の前に軽く運動でもするか。

ハア、まさか、時間を忘れる程やっちゃもうとは……

軽くランニングしに家を出て帰ってきた後テレビを点けたら――

『ただ今7時58分、ただ今7時58分』

昨日と同じ声が聞こえた。

アレエエ？　なんでこんな時間？　まだそんなに走ってないと思っただけだ。

だって、まだ町内を――

そんなこと言ってる場合じゃねえ！

軽く汗に濡れたTシャツを洗濯機に突っ込む。シャワーを浴びる時間は無いから掛けてあったハンドタオルを水で濡らして身体を拭く。その後、部屋に戻り制服に着替える。そして、昨日と同じようにトースト2枚と牛乳1杯を胃に流し込む。ここまで10分。やる動作が昨日より多いため、所要時間が同じってことは、かなり頑張ったな、今日の俺。玄関で鍵を掛けると、Let's go！

学校に着いた俺は、教室に向かう。

結局遅刻だ。だけど、5分程の遅刻のはずが、イロイロあって学校に着いたら1時間目が始まってしまった。確か、俺等のクラスは、数学だったな。そう考えていると教室に着いた。

教室の後ろのドアの前に立ち、横へスライドさせる。そして、中へ入ると――

「遅刻だぞ、煌。初日、今日と二日連続だぞ」

「すいません、ちょっとイロイロあって」

高崎先生が、遅刻宣告。俺は、謝って遅刻した理由を言おうとする

と、

「ふうん、でも遅刻な」

「マジッスか？ 普通理由聞かないッスか？」

先生は、普通に流した。え？ こういうのって理由聞かなきゃダメじゃね？

「知るか、んなもん」

「ちよっ、横暴だ！ 理由くらい聞いてくれてもいいじゃないスカ！」

「黙れ、うるせーと、数学に煙突建てるぞ、コラ」

「すいませんでした」

速攻で謝る俺。

あの先生ならやりかねない。俺だって通知表に1は、付けられたくない。そう思いながら、窓側の後ろから2番目の俺の席に座る。

「朝っぱらから、災難だな。間月。――で、朝何があったんだ？」

前のヤツが振り向いて聞いてきた。ツンツンした黒髪、顔は、整っていて、アレだ、ジャニーズ系っていうヤツか？ 作者もジャニー

ズ系のことはよく知らないが……

斬^{きりざき}崎 剣――、昨日、俺に変な質問ばかりしてきたバカで、昨日一

日でいつの間にか友達的位置に就いたヤツだ。

「イヤな、遅刻しそうで、走ってたら風空学園の制服着たヤツ等に絡まれてね」

そうなんだよ、絡まれてて逃げ回ってたら、こんなに遅くなったんだよ。

あーっ、思い出したらムカついてきた。ぶん殴ればよかった。イヤ、

実際にはやらないよ？ 面倒事は嫌いだし。

「風空学園のヤツ等にか？ 何があったんだ？」

斬崎は、驚いて目を丸くする。

風空学園と言えば、生徒数1000人は越えるマンモス校で、偏差値40〜75以上と、かなり広く生徒を採っている。

そんだけ広く採りゃバカもある程度入ってくる訳で

「信号が赤で待ってたら金貸してくれってな。――で、青になるまで時間稼いだ後、ずっと逃げ回ってた」

イヤア、疲れた疲れた。ずっと追いかけて来んだもん。普通さ、諦めない？」

「何だよ、ボコッちまえばよかったのに」

「イヤ、無理だから。相手高校生だぞ？　むしろ、マジで金渡しちゃおうか、迷ってたよ」

面倒事は、ウンザリしてんだよね、ホント、マジで。

「んだよ、ヘタレてんなあお前。オレだったら、ボコボコにして返り討ちなのに」

そりゃ、剣道部の主将なら返り討ちにできるだろうよ。

ヘタレ？　ヘタレ上等！　俺は、平凡で楽しい日常生活が送れりゃ、それでいいんだ。俺が目指すは、普通の学生。大人たちは、今は軟弱な子供が増えたというが、それは違う。危険察知能力が成長したと言ってほしいね。長い間、世間から離れてた俺が言うことじゃないが。

とにかく！

楽しい学校生活を送りたいのに、何が悲しくて転校2日目でV，S不良ライフにシフトせにゃいかんのだ？

「いいんだよ、ちゃんと撒いたから。その後来たんだから、100パーあいつ等に学校の場所は割れてない」

「でも、お前、制服着てたじゃん」

「……」

――忘れてた。どうしよう、俺の楽しい学校生活がああ……

「ま、オレがいたときは、オレがノしてやつから気にすんな」
な〜んてな

「大丈夫、アイツが、どこのヤツだ？　って聞いてきたから隣町ですって言ったらあっさり信じやがったからね。バカだぜ、アイツ。隣のヤツが朝から、しかも制服でいるわけないのに」

アレで偏差値40もあんのかよ。

「騙された振りかも知んねえぞ？」

「ナイナイ、オレが撒いたときの決め手が、アイツの”どこ行ったら”に対して、隠れて声色変えて右に行きましたよー、って言ったら飛んでったんだぞ」今、思い出しても笑えるね。あんな、バカなの思い出したらムカつきがおさまったぜい。

「ブハハハハ、それホントかよ!?　――アレ?　オイ、シカトすんなよ」

斬埼が大笑いした瞬間、オレは今更だが、授業の準備を机から出した。因みに、この教室も静まり返ってる。

さて、読者の方々に問題！

斬埼が大笑い

今は、授業中

そんでもって、クラスが静まり返る

何を意味するか分かるかな?　分からない人たちは、明日学校でやってみるといい。

「オイ、シカトすんなよ」

俺が無視したのが気に食わないのか、語調を荒げる斬埼。

バカかコイツは――

「オイ、間づ「剣い、テメエさつきからうるせーぞ」き……」

後ろには、二つの三角定規を装備した、タ・カ・サ・キ・セ・ン・セ・イ

さーよーならー友よーさよーならー友よー（友よ）わすれーまいこのひをーいーつーまあーでもー♪

頭の中で小学校の卒業式で聴いたような歌が流れる。

じゃあな、斬埼。君の事は、忘れないよ、きつと……

「お前もだ、煌」

「何故につ!?」

バカな、斬埼が大笑いした瞬間に用意を準備するフリをしたはずなのに！

ハッ、まさか、先生は血継限界を――

「先生、あなたはまさか三大瞳術の○眼をエブッ!？」

三角定規の細長い方（直角三角形）で眉間を突かれた。

「オレは、点穴も視えないし、透視もできん。あんだけ騒いでりや、分かるわ」

なんだと——あえて泳がせていたというのか。

——こやつ、できる。

「お前等、マジで煙突建て「すいませんでした!」る、オ、オオ」
速攻で謝る俺に先生もちよつとヒイている。

斬埼はというと、俺が頭ん中で歌が流れている内に細長い方の三角定規で脳天を叩かれ床で悶えてる。

「まあいい。授業続けるぞ。」

ヒイているのから復帰した先生は、教壇へ帰っていく。

フウ、やつと授業か（誰のせいで遅れた）。

ん？ 斬埼。

どっかのお告げを斬って捨てる。

昨日は、給食食ったらすぐ帰ったから、今の授業が初授業か。

「そうだ、煌。教科書まだないだろ。隣のヤツ、唯香、見せてやれ」

「はい、間月君、これ」

隣のヤツ——かみしな ゆいか神科 唯香は、こちらに机を寄せて教科書を左側、

つまり俺の方に置く。何故か、周りから殺氣が送られ——贈られてくる。

「サンキュ」

神科とは、昨日質問コーナーの後、給食の準備中に仲良くなった。

この学校は、給食は生活班でたべる。そんで、神科は、隣なので班の形にすると俺の前にくる。その時に、話して仲良くなった。

え？ 見た目？ さっきから殺氣を贈られてるんだ、分かるだろ？

さっきと殺氣を掛けてみました。

……

……

ゴメンナサイ、ホントゴメンナサイ！ ブラウザ閉じないで！ で、

何だっけ？ そう、神科の外見だったな。
えーっとね、ぶっちゃけかなり可愛い。

明るいブラウンの髪をセミロングにしている。
顔も整っていて、大きく透き通ったブラウンの瞳。鼻筋もスツと通
っていて、頬は、赤みが差している。美人というよりは、可愛い系
だね。斬埼によると、学校のアイドルらしくて、告白された数が5
0を超えているとか。何でそんなに詳しいのかを聞くと、昨日、今
日と風邪で休んでいる俺の後ろの席が情報通で以前教えて貰った
らしい。

「？ どしたの、こっちはかり見て」

ウォイ、解説しててボーンとしてたらしいな。

「イヤ、なんでもないよ。ちょっと説明してただけ」
「？」

神科は、“？”マークを頭の上に浮かべながら首をかしげる。

うん、可愛いね。告られたのが50回以上ってのは本当らしいね。

——変わってねえよな。

「で、今ってドコやってんの？」

「えーっとね……連立方程式の解の求め方をやってるん——」

キーンコーンカーンコーン

神科が言い終わるか終わらないかでチャイムが鳴った。

「ハイ、今日の授業終わり！ 煌、今みたいに次の授業からも唯香
に見せてもらえな。じゃあ、号令」

そう言うと、学級委員が号令をかけた。

『ありがとうございます』

先生は、オウ、と返すと教室を出た。

俺の4年振りの授業は、雑談& a m p; , 解説で終了。
ハア。

その後は順調に授業をこなしていき、ただ今、昼休み。

オイ、作者。何故、俺のスバラシイ授業態度を映さん？

え？ 面倒臭かった？ 潰すぞ、コラ！

……

……

……

……スイマセン、出番減らさないで。俺一応主人公だから、こんな序盤で出番減らされると話が成り立たないから。イヤ、ホントゴメンナサイ。

「オイ、間月。お前何で頭下げてんだ？」

「イヤ、作者様に俺の誠意が伝わるようにな」

「作者に？ 何やらかしたんだ？」

おお、番外編でもないに作者で話が通じたぞ。そんな、俺達がいる場所は、今だに強い陽射しが降り注ぐ屋上でございます。

あゝダリィ。

何でこんなところに連れて来たんだよ、斬埼は。

俺は、暑いのだメなんだよ。一章の1にも書いてあんだろが。ちゃんと、それなりの理由があるんだろうな。

「イヤー、気持ちいいね。この爽やかな青空の下、この日光を嫌いなヤツがいたら見てみたいね。そう思わないかい、間月」

潰したるか、コイツ。俺は、朝から走って疲れてんだよ。俺の貴重な回復時間を潰しやがって。

「お前、そんな事のためだけに、俺をここまで連れて来たのか？」
潰す気満々だが、あえて確認のために聞く。

「ああ、そうに決まってるだろ。こんな素晴らしい場所を教えてや

ったんだ、感謝しろよ、ってアレ？　どうした、俯いて。感激して声も出ないか？」

キューピーン！　煌君脳内裁判でこのバカは、有罪の判決が下りました。煌君は、かなり頭にキてるので控訴、上告は、受け付けません。執行猶予は、無し！　Let's　断罪。

「テメエ、俺は、朝っぱらから不良とのランチエイスで、疲れてんだよ。しかも、俺が暑いのが苦手と知って、こんな残暑の陽射しがバリバリ当たる場所に連れて来たのか？　来たんだよな？　そうだな？　よし、潰す！」

バカに有罪判決を言い渡した後、俺は俯きながら、ゆらゆらと斬埧に近づいていく。

「ア、アハハ、間月君？　暑いのが苦手だって今知ったんだけど」
知るか、俺の回復時間を奪った罪は重い。

「そ、それに、ほ、ほら、見上げてみるよ。あんなに綺麗な空見たら、あ、暑いのがなんか、わ、忘れられるぞ」

「忘れられるかああ、このクソヤロー！」

「ああん！？」

バカを殴ろうと振りかぶった瞬間、後ろから、ヤンキーな声が聞こえた。

「クソヤローだと、テメーコラ！　舐めとんのか」

ギギギ、と油の切れたロボットみたいに首を後ろに回す。

「ちようどいいじゃねえか宮内、コイツ等、ボコッてストレス発散しようぜ」

「イイネエ、そうすつか、あの先公共にどやされた分、コイツ等で遊ぶか」

そこに立ってらしたのは、見るからに、暴れてますよー、的なカンジのお二方。宮内って言われたのが、金髪で両耳に派手なピアスを着けた長身の男。

んで、もう片方が、俺達より少し小さく、ガッチリしたスキンヘッド。

ハア、朝、昼となんでこんなに絡まれるんだか。不良との遭遇率高すぎだろ。本当に、V，S不良ライフが幕を上げちゃうよ？
とりあえず――

「イ、イヤ、先輩方に言ったわけじゃないですよ？ ホントスイマセン」

謝る、全力で。それが、安全。それが、最良策。

「ああ？ 許さねえよ。おとなしく、オレ等に殴られろや」

「待てよ、中島。それじゃ、つまんねえだろ。オイ、白髪。お前が土下座したら、“考えて”やるよ」

スキンヘッドは、中島とか言うらしい。つつーか、土下座！？ まあいいか、その程度で済むんなら。

そう思って土下座しようとする

「オイ、待てよ。アンタ等。自分が悪いのにオレ等に八つ当たりするなよ」

斬埼が前に出て、二人組に言った。

「んだよ、テメーはよ。土下座すれば見逃してやるって言ってんの。アー、もう許さねー。テメー等後悔すんなよ」

「テメー等こそ、後悔すんなよ。こんな爽やかな気分を台無しにしやがって」

あーあ、せっかく謝れば許してくれたのに。嘘だとしても、隙を突いて逃げる事も出来たのになあ。

「テメー、調子こいてんじゃねえぞ、コラァ！」

スキンヘッドが斬埼に殴りかかる。しかし、斬埼は、軽く左手でいなしでカウンターで右ストレートを顔面に入れる。のけ反ったところに左の足刀を鳩尾に入れて、そのまま左足を戻さずにスキンヘッドのバランスを失いかけた足元を払う。

「ギャピッ！？」

面白い声を上げて仰向けに倒れる。

「テメー、調子んノリ過ぎなんだよ！ 死ねやあ」

スキンヘッドの足元を払っている隙に、俺と斬埼の間に入り込んだ

金髪が後ろから殴りかかる。つつーか、コイツ等俺の事忘れてるよな、ラッキーっちゃラッキーだけど。

「遅いんだよ！」

斬埼は、振り向くと同時に回し蹴りを放つ。いわゆる、後ろ回し蹴りって言うヤツ。金髪は、突然の事に反応するが、出来たのは殴りかかるスピードを緩めることだけ。そのまま、金髪の頭に蹴りが打ち込まれ昏倒した。

「あべしっ」

オォ、断末魔が某世紀末の格闘漫画だ。

「フウ、雑魚が！」

斬埼が使い古された凡庸格闘漫画モノの、捨て台詞を吐く。

斬埼の前と後ろには、白目をむいたスキンヘッドと金髪が倒れている。

「つつーかお前ホントにヘタレだなあ。すぐに土下座しようとするなよ」

俺の方に向くと、斬埼は、そう言った。

「あれで、済むなら安いもんだって。プライドなんて下らないもんで護れるもんなんて、たかが知れてる」

そーそ、ヘタレで楽出来んなら、喜んでヘタレを演じよう。必死になるのは、もう疲れた。

「何だそりゃ。漫画のクールな脇役っぽい事を言って。結局逃げるだけのヘタレだろ」

「良いんだよ。三十六計、逃げるにしかずって言うだろ？」

暴力で解決なんてナンセンスだ。

「そうかあ？ お前は、悔しく無いのかよ」

「さっきも言ったろ。プライドで護れるもんなんてたかが知れてるって。ほら、授業が始まっちゃう。早く行こうぜ」

もうそろそろ、チャイムが鳴るはずだ。ハア、結局休めなかった……。

キンコーンカーンコーン

「ホントだ。ヤベーぞ、早くしろ」

オイ、お前が忘れてたんだろうが。そう思ったが

「ヘイヘイ」

そして、俺達は、教室に戻って行った。

思ったけど、あのスキンヘッドと金髪、名前だす必要あったか？

「オーイ、間月早くしろ」

……ま、いっか。

一章2..ヘタレ？（後書き）

煌..さて——遅れた理由を聞こうか？

五..すいません。いつもは、ケータイで書いて、パソコンで修正して投稿してるんですが——

煌..さっさと話せ

五..私情でドタバタしてて、出かけた先でもケータイ忘れてて、書き終わってもパソコンがなかなかし　　ようできなくて

煌..誰が悪い？　こんな駄作でも読んでくれる人様がいるんだぞ

五..ホント申し訳ないです。っていうか、お前ヘタレだろ？　何で

そんな強気なんだよ！

煌..お前がそう書いてるんだろ。それでは、次回もよろしく願います！

五..まあ、そうだけどさ。あつ、テメエ抜けがけすんな！　よろしくお願いします

一章：癒し系？（前書き）

遅れてすみませんでしたorz

一章：癒し系？

「ここの、“メロスは激怒した”とあり、あと“人一倍正義感が強かった”とあります。その後、城に乗り込みましたが、激怒した理由は、何ででしょう」

ハイ、ただ今昼休みから約5分後、五時限目の国語の時間であります。

前で話している名も知らぬ教師は、中年の男性でいかにも

「メタボですが何か？」な体型の人なのよね。

さて、こんなバカバカしい話を聞くよりも、妄想の淵に沈んでた方が、若者の精神的成長を促せると思うので、Let's 妄想スタート

「それじゃ、間月君。答えて下さい」

アウチ！ 沈もうとした瞬間に、海上保安官達に引き上げられたヨ。
「妹が結婚するのが、シスコンのメロスには堪えられず、妹の結婚相手を社会的に抹殺しようとして罪をでっちあげ、それを王に知らせるために王城に乗り込んだと思います」

「君の、設定を最大限に利用しての妄想は、大変見事です。しかし、ここは貴方の二次創作の発表じゃなくて、教科書に書いてある事実を述べる問いです。そんな人を蹴落とすような歪んだ正義感はいりません」

「スイマセンデシタ」

片言で謝る。それにしても、あのつつこみは優秀だな。さすが名も知らぬ国語教師。だてに国語教えちゃいないぜ。

「座りなさい」

そう言われて俺は座る。

さて、改めて妄想の淵に沈もうかね。

イヤ、妄想っても思春期特有のピンク色の妄想じゃなくて、アレよ？ 哲学的な妄想よ？

妄想、妄想うるさいので、もう、ニュートラルな単語“もの思い”にふけろうと思います。

キンコンカンコン

「じゃあ、今日はここまでです。号令」

オイ、何だよ。俺の崇高なる思考を邪魔ばかりしやがって。

『ありがとうございます』

礼をした後、俺は、机に突っ伏す。

休み時間なら、大丈夫だろう。

改めて、Let's 思考の淵へ

「ねえ、間月君。次は、理科室だよ？」

左手で顔を押さえて、

「運命は、時に厳しい」

某ゲームの某キャラクターの某台詞を言った。何で、お前が知ってんだ？ って聞かれたらこう答えよう。作者により、ボケ&つつこみ用の記憶を挿入された、と。

「どしたの？ 早く行こうよ」

神科が左手で押さえた俺の顔を覗き込む。大きく澄んだ瞳が、指の隙間から見える。やっぱ、アレだなあ、かなりモテるってのは分かるなあ。何つうか、癒されるもん。ハッ、これが、今回のタイトルの由来か！

「ホントにどしたの？ 大丈夫？」

そんな事を考えていると、神科の瞳に不安の色が混ざる。俺が、手で顔を押さえたまま、動かないからだろう。

うわあ、何かすげえ罪悪感に駆られる。

「イエッサー、問題無いであります。大佐！ ところで、斬埼は？」いきなり、背筋を伸ばし軍隊的な、敬礼のようなポーズをする。

「ひゃっ！？」 あ、うん、斬埼君は、先にトイレに行ってから行くって言って、終わったと同時に飛び出してったよ？」

神科は、一瞬ビクッとした後、こちらに向いて答える。

斬埼、あのやっつ昼休みの後、理科室知らないから案内しろって言ったのに

「チッ、あの野郎、案内しろ言ったのに。神科、代わりに案内してちょ」

舌打ちをした後、知らないまま理科室に、休み時間内にたどり着ける確率は低いので、神科に頼む。

「うん、いいよ、それじゃあ、行こう？」

「ありがとうございます！ 軍曹殿！」

「どういたしまして、って格下げ！？」

神科は了承した後、俺の礼十ボケにつっこみを入れる。おお、予想外なつっこみのスキル。作者は、ほんわかせた癒し系を計画していたのに。

そんな感じで、俺達は教室を出た。

私達は、みんなが談笑している休み時間の廊下を歩いている。

私が案内するって事で間月君は、私の数歩後ろにいる。

私達の間に会話は無いけど、休み時間の喧騒のおかげで、それほど気まずくはない。

「なあ、神科、廊下で話してる体育祭とかっていうのっていつやんだ？」

「ふえっ！？」

間月君が、話しかけてきた。

いきなり、問い掛けられたので、ちょっとびっくりしながら間月君を見る。

長めの髪は、寝癖かなあ？ ボサボサになっている。顔も整っているけど、アイドルみたいなじゃなくて、なんて言えбайいんだろ？ 普通に整っている感じ？

そんな感じで一つを除けば、どこにでも居そうな人。そして、一つ平均から外れてるとすれば、髪の毛の半分以上占めた白髪。

「オーイ、神科あ、どうしたあ？ 聞いてっかあ」

「えっ？ あ、ゴメン、体育祭は、9月の2週目の土曜日だよ」

考え事をしていた私は、返答が遅れて間月君が妙に間延びした声で聞きながら私の顔を覗き込んできた。

「ふーん、体育祭……ねえ。こんな暑いのによくやるなあ」

「あはは、そうだね。私も運動苦手だから」

間月君のダルそうな言い方に、私も苦笑いを浮かべながら話す。体育祭かあ。うう、やだなあ。

間月君は、暑いからかもしれないけど、私は本当に運動が苦手。お祭り事は結構大丈夫なんだけど、みんなの足を引っ張っちゃうかな、と思うとちよつと憂鬱になる。

「まあ、なんとかなるでしょ。当日は温暖化のリバウンドで氷河期到来とかで」

間月君は、暑いのを回避できれば、どうでもいいらしい。

「それは無いと思うよ」

「じゃあ、学校全体にクーラー設置するとか」

「広すぎるし、屋外だから冷風はみんな逃げちゃうよ」

暑いのは、ホントにダメらしい。

「神科あ、こういうのは、想像するだけで良いんだ。辛い現実を見せつけないでくれ」

間月君は、「うああ」とか言いながら、両手で頭を抱えてうずくまっている。

精神的ダメージは、かなり大きいらしい。

復活するのを待ちながら、ふと考える。

似ている。コウちゃんに

半分以上占めた白髪。ずっと傍に居てくれた人が頭を掠める。

けど……

ありえない。パパから聞いた。あの人はもう居ないって。死んだんだって。

けど、名字は違うけど、名前は同じ。見た目だって面影が残っている。

だから、どうしても頭のどこかで期待してしまう。

自分でもバカな事だって思ってる。これじゃ、間月君を見ていない。自分自身を見てももらえないのが、どれだけ辛いのか分かってるはずなのに。

「ホラ、何やってんだ神科。遠い目をして。遠隔透視か？ まさか、君も○眼の使い手なのか？ この学校、血継限界いすぎだろ。しかも、○眼に限って」

「だっ、大丈夫だよ。ちょっと昔を思い出してただけ。チャクラの流れなんて見えないよ」

「ウワオ、知っていたとは意外だな。つつーか、チャクラは、少し伏せ字にしろよ」

「あはは、ゴメン」

「因みに、神科が回想している間に、チャイムが鳴りました」

悪戯っ子みたいな笑いを浮かべながら、間月君は、爆弾発言をする。あの笑い方も、一度意識しちゃうと既視感を覚える。

その前に

「ええっ！？ もう鳴っちゃったの！？」

うわぁ、遅刻だ。早くしないと。

「早く行こう、間月君っ！」

「ウィース」

そう言っつて、いつの間にか、みんなが教室に入った廊下を走る。

理科室は、もう見えているから、間月君も後ろじゃなくて、並んで走ってる。

もう少しで……

遅刻ギリギリのような描写だけでも遅刻してるんだよね。そんな

余計な事を考えていると

「わわわっ」

足がもつれて転んだ。

うう、痛い。 立ち上がる瞬間に、間月君が

「これって、癒し系なのかなあ、見ている分には癒されるんだけど」
数歩先で、そんなことを口に出していた。

？ 癒し系って？

理科室に着いた俺達は、先生の注意を受けながらも、自分達の班の
所へ行った。

「遅ーぞ。間月に神科さん」

「ごめんなさい」

素直に謝る神科、君の心は、純粹だよ。だがオレは、
机にそんな事をのたまう斬^{バカ}埼の脳天に肘を落とす。

「遅刻したのは、謝ろう。だけど、テメエにも謝罪の言葉があるだ
ろう？」

置いていったバカに謝罪を促す。

「頭がつ、ヤバイ、記憶がつ、飛ぶって」

「オラ、悶えてないでさっさと答えろ」

「ホントツ、痛い。っつーかさあ、お前ヘタレだったじゃん。なん
でそんなに攻撃的なんだよ」

「なんとかな…逃げ切るためには、ある程度敵を弱らせないと。な。
さっさと答えろと言ったはずだが」

「なんとなくって言おうとしたよな！？ なんで謝らなくちゃいけ
ねんだよ。八つ当たりは良くないぜ？」

「ああ、約束を破るところか、忘れてることはヒジョーに良くないな」

「約束？ お前とそんなんしたっけ？」

「神科、今日の授業って硫酸使うよな？」

「うん、今日は、金属の分解だから使うよ」

「うわあ、ちよっ、待っ、思い出したから！ 案内するの忘れててゴメン！ だから、硫酸は、カンベンして！」

「やっと思い出したか。だけど、不良に2回もエンカウントしたり、約束破られたりしてムカつくから断罪」

「ふざけるなああ！」

「大丈夫だよ、斬埼君。ギャグキャラの回復力は、ラスボスより高いから」

「ちよっ、神科さんまで。つつーかオレ、今までのトータルするとつつこみじゃん！？」

「たかが、登場して3話目で何を言うか。今までののは、作者の技術が未熟だったただけだ」

そう、全ては設定を活かす文章力&構成力のスキルがまだ未熟な作者が悪い。

よって俺が斬埼を処罰しても責任は、作者になる。
では――

「さよーならあ」

「やめろおとおおっ！」

「何をしてるんです？ さっきからあなた達は」

悲鳴をあげる斬埼を無視して、硫酸の入ったビーカーを振ろうとすると、俺のビーカーを持った方の捕まれた。

「あなた達、そんなに硫酸を浴びたいのなら、かけてあげますよ？」
俺の手を掴んでいる反対側の手には、やはり同じように、ビーカーに透明な液体が入っている。

「イヤ、そんなのは、俺じゃなくて、M気質な斬埼君だけが望みます」

「Mじゃねえ！ 先生、コイツが浴びたいらし」「これはですねえ、私の自信作でして、私独自に考えた方法で濃度をあげましてね。おそらく、教材用の原液より2、3倍は高いでしょう。怖くてまだ試していませんが」……はい？」

斬崎も、俺になすりつけようとするが、それを遮って説明し始めたそのピーカーの中身に、斬崎は続きを忘れ、その液体の概要を聞き返した。

「いやあ、苦勞しましたよ。化学部そっちのけで準備室に引きこもって調整してたんですが、試作品なんかピーカーまで溶かすようになっちゃいました」

いたよ、こんなマンガみたいな狂った化学者が。
マッドサイエンティスト

「先生、とりあえずボク達は、バイオ○ザードみたいな身体にはなりたくないんで」

あんな筋肉とかが露出した生物にはなりたくない。

「強力でまだ有機物には、使っていないんですけど、生徒が志願してくれるとは」

「いや、志願してませんよ。っていうか、生徒を実験台にしちゃダメでしょ！」

次は、斬崎がつっこむ。マジで生徒を実験台にしたらまずいだろ。

「で、最初どこにします？ 手にしますか？ それとも腹？ ああ、粘膜には、こういうことになるのかも試したいんで口の中にもやってみたいんですが」

聞いてねえええ！

「オイ、間月、聞いてないぞ！？」

「分かってるっ！」

ヤバイ、どうする？ 俺。前後左右の班は、避難している。みんな、怯えた目で「お前等がどうにかしろ」な、目線を送ってる。ヤバイ、援軍は望めない。先生は、目が据わってきている。

「先生、とりあえず授業を続けましょう」

斬埼が今更なことを言う。

「フッフ、コレが成功した暁には、オレを追い出した大学にコレを……、フツ、クククツ」

「先生ええっ!？」

ヤバイ、本格的にヤバイ。一人称が変わってるもん。つつか、大学追い出されたのかよ!

「こうなったらああ……」

こうなったら？ 策でも思いついたのか？

「神科さんの癒しパワーで止め「アホかああ」グハツ」

コイツに期待した俺がバカだった。

アレ？ さっきまでいた神科は？

「ううつ、今回は、私の紹介なのにつグスツ。いつの間にか忘れられて、イレギュラーで出来た理科の先生とのコメディになってる」

……居た。避難している他の班に混じりながら拗ねてる。

しょうがないじゃないか、全部未熟な作者が悪い。

マッドサイエンティスト

「神科さん！ あなたの力であの狂った化学者を止めて下さい」

斬埼も、見つけたようдейつの間にか神科に懇願している。

「グスツ。えっ？ 私が？」

ムリに決まってるだろ。忘れてたんだぞ？ 普通は断るよ。

「できるかどうか、分からないけどやってみるよ」

マジで!？ めっちゃ心が広いよ。聖母やあ。

神科は、コッチを睨んだ後、先生の方に行った。

睨んだ？ 何故？ 何故俺？

「大学のバカ共に思い知らせてやる。このオレの知力を！ 偉大さを！」

斬埼には普通で俺が何故？

そんな場合じゃねえ！ 先生のアレは、もはや教材じゃねえ、兵器だ。

止めに行かないと

「先生、もうやめて下さい。授業を続けましょうよ」

「神科っ！ 離れろ」

「っ！？ 神科さん！？ いや、スイマセン。これは、その、あの」

アレ？ 正氣に戻ったぞ。それどころか、テンパリ始めたぞ？ 顔も赤いし。

テンパる？ 赤い？

……

……

……イヤイヤ、ないない。先生が神科に惚れてるなんてありえない。つつーか許さない。主人公をないがしろにして禁断の恋愛なんて。もうちょい、せめて斬埼辺りだったら応援するが。

「先生、授業続けましょう？」

「えっと、その……ハイ、そうですね。それでは、皆さん授業を再開します」

先生は、顔を赤くしながら黒板の前へ戻っていった。それに合わせて避難していた他の班も自分達の場所へ戻っていく。

「あの先生は、ロリコンで神科さんに惚れてるらしいからな。予想通りだ」

マジかよ。

「いやあ、それにしても先生のおんなところなんて初めて見たぜ」
俺達も席に着く。

「それでは……」

先生の説明が聞こえる。もう一度、道具を取りに来い、とかそういう話らしい。

「じゃあ、オレは、道具取って来るわ」

斬埼は、そう言うど席を立ち準備室に向かっていった。

「オイ、神科、何でさっき俺だけ睨んだんだ？」

暇だから、隣で実験の方法を板書している神科にさっきのことを聞いた。

「えっ？ あ、なんでもないよ？ その……うん、なんとなく」

少し顔を赤らめながら、両手を胸の前辺りで左右にバタバタ振りな

がら、答える神科。

うーん、やっぱ癒されるわぁ。

つつーか、なんとなくかよ！

つつーか、疲れた。不良とのエンカウント2回にマッドサイエンティストとのプチ騒動。

すっごい1日が濃いんですけど。

俺の目指す学校生活の180度逆をいってるんだけど。

「オオイ取って来たぞ」

「そいじゃ、始めるか」

斬埼が帰って来て、実験を始める。

そんな感じで今日最後の授業も終わる。

ハイ、放課後〜。

帰りのホームルームとかは、もう今回の字数もヤバイんで割愛。

「間月、そいじゃお前って部活どこに入るんだ？」

「そういえば、私も知りたい」

斬埼が、鞆に教科書を入れていると、話しかけてきた。神科も、一旦帰る用意を中断して聞いてくる。

「まだ、決めてないピヨロよ。お前等は……、斬埼は剣道部か、神科はどこに入ってるんだ？」

神科は、どこに入ってるんだろ？

「私は、どこにも入ってないよ」

「ってことは、帰宅部か」

「うん……。習い事とかが忙しいから」

神科が残念そうに肩を落とす。

けど、俺も帰宅部が良いなぁ。楽そうだし。

「じゃあ、俺もそうすっかなあ」

「部活見学は、しないのか？」

「めんどくさいからいい」

「見学ぐらいしろよ。いいのが見つかるかしんねえぞ。願わくば剣道部に！」

「いや、もう決めたから。見学ぐらいは良いけど、疲れてっから明日以降な」

「ちえーっ、まあいいや、オレは、部活行くぜ。また、明日な」

「オウ、じゃーな」

「斬崎君、またね」 斬崎は、鞆を持って出て行く。

「うっしや、俺達も帰っか」

「私は、このあとちよつと高崎先生に呼ばれてるから」
神科は、申し訳なさそうに答える。

まあ、いいけどね。

「そか、んじゃな、神科」

「うん、また明日」

そう挨拶を交わすと俺も教室から出る。
なんかすごい1日だったなあ。

あの先生、結局名前分かんなかったなあ。

一章：癒し系？（後書き）

前回の後書きにやる予定だったキャラ紹介を

間月 煌

身長 168cm 体重 55kg 容姿 中の中

髪 長めでボサボサ、黒髪と白髪がほとんど半々 瞳 黒

後書きに書けるのは、このくらいです。要望があれば、一話分使って、他のキャラと一緒にもうちょい詳しい説明を入れるつもりです。それでは、さようなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8867d/>

Load And Sin

2010年12月18日14時21分発行